

## 1. コース概況

初日の幕営地である塚脇小学校の体育館横の側道を出発し町道をひたすら南へと進み途中の道標に従い分岐を右折し西へと進む。車道は坂道になって樹林に入り、進むと登山口へ到着する。九州自然歩道だけあって、登山道は歩きやすい。少しずつ傾斜が増して、ジグザグコースを登っていく。途中に一所倒木があり通りにくいがおおむね整備されていて気持ちよく登っていける。やがて大きな岩が目立つようになり、自然林へと変わる。このあたりの斜度はやや厳しくなっている。大きな岩の下には、石仏などが祀られており、頂上近くまで何体かが続く。斜度がゆるくなり、ササ藪を抜けると空が明るくなり、突然頂上の台地へと飛び出す。下に珍珠盆地が広がり、展望の良さで、まずは達成感を味わえる。登山口から約30～40分といったところか。

頂上台地は明るく広い草原で、ファミリーエリアとなっている。草の斜面に設置された3基のブランコはさながらハイジのブランコともいえ、一度は乗ってみる価値がある。草地を突っ切ることもできるが、今回は遊歩道に沿って進もう。舗装の遊歩道を南に歩くと、まもなく駐車場と東屋の休憩所に着く。そこからさらに山頂への案内に従い南へ50mほど進み、鋭角に折り返したところが山頂（三角点）685.5mである。

地形図を確かめながら、小高い丘に登ったら、大きな石仏の先にポールが立っていた。「なんで、前回、気づかなかったのかな。とにかく見つけて良かった」。どうやら、最高点にこだわった気もする。9月中旬の時点では辺りにオトギリソウ、アソノコギリソウ、オミナエシ、ワレモコウなどが咲いていた。

台地状の「メサ」地形の頂上部を利用した芝生広場を抜けると東屋があり、車が20台ほど駐車できる駐車場に出る。駐車場からは直接確認することができないが、東屋の左奥を少し行くと石仏が立つ三角点がある。ここが伐株山（685.5m）の山頂である。

駐車場から左手に伸びる未舗装の砂利道を電波塔が見える方向へ進む。この電波塔は、テレビの地上デジタル放送の中継局である。1つ目の電波塔の直前、道沿いの左手に展望の良い場所があり、珍珠盆地を再度見渡すことができる。砂利道をさらに進み、2つ目の電波塔を回り込むと、「針の耳」方面への下りとなる。笹を踏み分けて1～2分進むと急に笹が少なくなる。ここからが「針の耳」の岩場である。険しさが急に増し、鎖場となっているので注意が必要だ。

「針の耳」は数個の岩が重なり狭い石のトンネルとなっている場所を指す。針の耳には「一般」ルートと「難路」ルートの二通りの道があるが、「難路」は狭い場所を通過しなければならず、ザックを背負ったままでは通行できないので、今回はう回路である「一般」ルートを通す。ただし、ザックのあるなしにかかわらず、この石のトンネルは昔から善人だけしか通ることができないと言い伝えられている。なお、かつてははっきり示されていた「一般」と「難路」を示した案内板は、現在では朽ちおり判別できない状態となっている。

「針の耳」には点在する大小の岩を利用して、四国八十八ヶ所の各寺の本尊が刻まれている。明治3年（1870年）から明治17年（1884年）にかけて珍珠町の佐藤氏を中心とした人々が作りあげたものだそうだ。梵字や磨崖仏が彫られている3mほどもある大岩を過ぎると、車道まであとわずかだ。車道まで20～30m程手前から車道までは両サイドに仏像が並べて置かれている。このスロープ状の草地付近ではスズメバチに注意が必要だ。試走に入った数隊がこの付近でスズメバチに遭遇している。各隊1匹ずつの目撃情報であるが、安全のため素早く通過してほしい。ここを過ぎると車道に至り約1時間ほど万年山へ向けて歩くことになる。

切株山針の耳コース下山から続いた長い舗装路歩きで高度を上げると視界が開け吉武台牧場に到着する。ゲートの手前に屋根付きの資材置き場があり、その前に20台ほど駐車可能なスペースがある。ゲートを抜けると道標と案内板があり、案内図の「避難小屋」方面にルートを取る。コンクリート舗装された道を上ると10分ほどで西に万年山山頂が見える。万年山は二重メーサと呼ばれ、三角点のある山頂の台地を本万年（上万年）という。

山頂部は柱状節理で構成されているが、この角度からは植生に覆われて判然としない。東には「まんじゅう石」が名前の通りこんもりと盛り上がっているのが見える。

前万年(下万年)の広大な牧草地を南東に万年山を望みつつ歩いて行くと南にミヤマキリシマの小群落がある。くじゅう連山が見渡せるビューポイントでもある。道がやや下りになると左手にトイレを併設した避難小屋が樹間に姿を見せる。ベンチが並びその下の方には水場や幕営可能なスペースもある。そこから150m程緩やかに登ると万年山山頂と周回コースの分岐に出る。山頂へは舗装路を南に上るが、右手の広場に看板が立っており、さらにその右奥の未舗装の登山道が周回コースとなる。車両も通行可能な幅があり歩きやすい道である。快調に高度を下げていくと両側は杉の植林帯となる。作業用の枝道が何本もあるが「林道」という標識が有り、登山道と区別されている。また、「はな畑/鼻ぐり」という道標も出てくる。次第に道幅が狭くなり、ススキが両側から被さって歩きにくくなるが、西に見える小高いピークを回り込むように歩いて行くと視界が開け「お花畑」に出る。広々とした登山道の両側は総面積40アールに及ぶミヤマキリシマの大群落である。赤やピンクの季節外れの花を咲かせている株も見受けられる。

コースの最低鞍部に近づく手前でT字路となる。国土地理院の地形図には記載されていない新しい林道でコンクリート舗装の色も白々として新しい。ここは右にルートを辿り下っていく。10分も歩くと鎖が張っており、左側に鋭角に切れ込むと「万年山山頂まで2.9km」の道標が立っている。道は登りとなるが階段が整備されており、急登で高度を稼ぐ。ひと登りすればそこは本万年の西端と言っても良く、勾配も緩やかになる。南側の眺望も開けて奇岩の石庭のようなスペースも現れる。笹の中の一本道をゆるやかなアップダウンを繰り返しながら快適な空中散歩を楽しもう。路傍にはアキノキリンソウ、リンドウ、ヤマラッキョウなどの可憐な花も目を楽しませてくれる。視界が開け草原が広がると、そこが万年山山頂である。山頂標識の北側に3等三角点(万年山1095.2m)がある。そこから南東にベンチと「万年山の由来」の看板の立つ小広場がある。看板の右手に踏み分け道があるが、これが下山ルートとなる。万年山から南西に向かう下山道を辿るが、「宝泉寺温泉・万年山」の標識に出会ったところで、南に向かう小道へと右に進路を変える。地図上では国土地理院地図では南西に道が延びているが道が荒れているため、今回は南への下山道を使用する。歩を進めると、黒土の斜面となり、やがて植林帯の中を進む。傾斜が緩くなると、目の前に砂利道の九州自然歩道が現れるので、東へ進めばやがて地理院地図とのルートと合流する

## 山城について

### 切株山

伐株山(きりかぶさん、きりかぶやま)は、1950年7月に国内で初めて指定された国定公園である「耶馬日田英彦山国定公園内」に存在する標高685.5メートルの山である。メサ(卓状台地)のうちでも浸食が進んだビューポイントと呼ばれる地形であり、二重メサの万年山(標高1,140.3メートル)とともに玖珠町のシンボリックな存在である。

現在は、平坦な頂上はパラグライダーの基地や町民の憩いの場となっている。2016年4月にはJR九州の「七つ星」をはじめとした車両デザインを手がける水戸岡鋭治氏のデザインによる無料の休憩所「KIRIKABU HOUSE」がオープンし、山頂から玖珠盆地を眺めながら休憩をすることができる。

また、山頂にはかつて九州における南朝側の拠点となった玖珠城(伐株城・高勝寺城)の土堀跡が残っている。『豊後国風土記』によると、玖珠(くす)という地名は、かつてこの地に存在した大きなクスノキにちなむものであるという。そして、伐株山は大きなクスノキの木陰となって日が当たらずに困った住民が、それを切り倒した後の切株であるという伝説がある。

### 万年山

万年山（はねやま）は、大分県玖珠郡玖珠町の耶馬日田英彦山国定公園内にある標高 1,140.3m の山である。下万年と上万年に分かれる珍しい 2 段メサ（卓状台地）であり、九州百名山の一つとされるとともに、2007 年には「玖珠二重メサ」として日本の地質百選に選定されている。メサが侵食されてできたビュートと呼ばれる地形の典型例である伐株山（標高 685.5m）とともに玖珠町のシンボリックな存在である。

大分百山にも選ばれており、山頂からは、南東に九重連山、東に由布岳、北に玖珠盆地が見渡せる。また、頂上付近は 5 月から 6 月にかけてミヤマキリシマが頂上一面に咲き、これを見るために他県からも登山者が訪れる。『豊後国風土記』によると、玖珠（くす）という地名は、かつてこの地にあった大きな楠に因むものであるという。そして、大楠の木陰となって日が当たらずに困った住民がこの大樹を切り倒した後の切株が伐株山であり、巨木が倒れる際にはね上げた土が山となったのが万年（はね）山であるという伝説がある。